慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パスカル・オリィ監修『新しい政治思想史』
Sub Title	Pascal Ory (dir.), "Nouvelle histoire des idées politiques"
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1988
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.61, No.9 (1988. 9) ,p.116- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19880928-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Pascal Ory (dir.)

Nouvelle histoire des idées politiques

Paris, Hachette, 1987. 643pp.

パスカル・オリィ 監修

『新しい政治思想史』

本書の「あとがき」を書いているルネ・レモン（René Rémond. 1918-）は、パリ大学第五校（ナンテール）の文学部教授であり、七一年から七六年まで同大学学長を務める。学外においては、八一年以降フランス政治学会会長の地位にあり、近代史研究所長をはじめ、ユネスコ社会・人文科学委員会、大学審議会、教育・社会的コミュニケーションの各種委員会の要職にある。主著としては、『フランスにおける右翼』(*La Droite en France: De la première Restauration à la Vᵉ République*, 1954. 但し、一九八二年版は *Les Droites en France* と標題を改変)、『カトリック・共産主義・危機』(*Les Catholiques, Communisme et les crises*, 1960)、『ド・ゴールの復帰』(*Le retour de de Gaulle*, 1983) などがある。レモンはフランスの政治学界、歴史学界の重鎮であって、その薫陶を受けたパスカル・オリィは、一九四八年の生まれ、歴史学のアグレジェの資格を有し、現在パリ大学（ナンテール）において助手を務め、また政治研究所講師として教鞭をとっている。彼がこれまでに発表した著作は、『対独協力者たち』(*Les Collaborateurs*, 1977)、『ド・ゴール、あるいはディスクールの秩序』(*De Gaulle ou l'ordre des discours*, 1987)、『ポール・ニザン』(*Paul Nizan, destin d'un révolté*, 1980)、『二つの五月のあいだ』(*L'entre-deux-Mai: Histoire culturelle de la France. Mai 1968-Mai 1981*, 1983)、ジャン・シリネリとの共著『フランスの知識人——ドレフュス事件から現代まで』(*Les intellectuels en France, de l'Affaire Dreyfus à nos jours*, 1986) その他である。そして、オリィの監修による本書は、四十二名の学者の協力によってなったものである。

Nouvelle histoire des idées politiques は、レモンが指摘しているとおり、それに先行する研究業績、すなわち Jean Touchard (dir.) *Histoire des idées politique*, tome I: *Des origènes au XVIII siècle*; tome II: *Du XVIII siècle a nos jours*, 1959. ならびに Jean-Jaques Chevallier, *Histoire de la pensée politique*, tome I: *De la Cité-Etat à l'apogée de l'Etat-Nation monarchique*; tome II: *L'Etat-Nation monarchique: vers le déclin*; tome III: *La Grande Transition, 1789-1848*, 1979-1984.

とりわけ前者に多くを負うている。『新しい政治思想史』は、古代および中世の遺産として、カトリシズムが政治と宗教に果たした決定的機能、世俗的政治理論の形成における国家理念＝主権と実践から先ず議論が始められ（マキァヴェリとボーダン）、時代としては、十七世紀以後から現代、文字通り同時代史までを含む。その《新しさ》とは、従来の編年史的叙述ではなく、《テーマ》もしくは《概念》を中心として、歴史的現実との対応において思想の問題を展開していることである。しかもそれらは、各専門分野の研究者たちに委ねられ、自由なスタイルで語られ、思想家の思想的体系性や整合性を論じることよりも、むしろ時代の流れ、具体的な出来事、相対立するイデオロギー状況の、それぞれ異なったコンテクストのなかで同一の思想家が幾度も現われ、彼らの思想的役割が再評価されている。さらに、《新しさ》の最も決定的な点は、過去二十年のあいだに変化した「イデオロギー的風景」(le paysage idéologique)――本書V. L'ÉCLATEMENT の「紛れもない新奇さ」――を収めていることである。

近代ヨーロッパの過去二世紀ないし三世紀にわたる政治思想を現代に蘇えらせた六百数十頁の本書を読むと、レモンが述べているように、思想の生命というものについて、ありとあらゆる反省をうながされる。歴史とはすべて時間における持続であり、そこには類似したものが浮びあがり、収斂が現われる。「私は本書を読んでいてたまたま、一七八八年の革命前の危機とフロンドの乱との近似、サン・シモンをイデオローグに結びつける繋がり、ハイエックとバークとのあいだの、事物の秩序をみだす人間の任意な干渉を同じように拒否する思想の共通点に気付く。最近の事象としては、テーヌとルナンの主題が一世紀を経てふたたび出会う反革命的な歴史の再現を、私は付け加えるであろう。反覆する現象もまた存在するが、それはなにひとつ伝達によるものではなく、状況のアナロジーによって引き起こされるか、あるいは問題関心の共通性から生じる。すなわち、一七九三年の熱狂的（アンターシュ）な人びとと、一九六八年五月二十二日の運動とのあいだ見られるように」。筆者もまた同感である。

本書の構成を示せば、以下のごとくである。

I. 近代政治思想の基礎　第一部　十七世紀・絶対主義の頂点と危機――《国家》第一章　ホッブズからロックへ、第二章　絶対主義への理論的・実践的批判、第三章　夢想された政治。第二部　啓蒙のポリティーク――《幸福》第一章　啓蒙的専制、第二章　モンテスキュー、第三章　ルソー、ルソー主義。第三部　革命の失敗――《民族》第一章　〝穏健化した〟革命、第二章　革命的ラディカリズム、第三章　反革命。

II. 開かれた三つの途　第一部　自由主義――《自由》第一章　連合王国――リベラリズムの保守、第二章　権力の試錬としてのフランス・リベラリズム、第二章　トクヴィル。第二部　マルクスなき社会主義――《平等》第一章　産業社会に直面する政治理論――サン・シモンとその弟子たち、第三章　プルードンとその遺産。第三部　ヘーゲル主義――《歴史》第一章　ヘーゲルにおける政治思想、

第二章　ヘーゲル左派、第三章　マルクスの思想形成。

Ⅲ．十九世紀の解決　第一部　社会革命――《プロレタリアート》第一章　マルクスのマルクス主義、エンゲルスのマルクス主義、第二章　世紀転換期のマルクス主義論争、第三章　アナーキズムと革命的サンディカリズム、第二部　進歩――《プログレ》第一章　オーギュスト・コントから共和主義的実証主義へ、第二章　フランスに反映したリベラル・デモクラシー、第三章　生存競争の社会・政治理論。第三部　周辺の三つの考察――《共同体》第一章　ラディカルな個人主義――シュティルナーとニーチェ、第二章　一九一四年までのヨーロッパにおけるキリスト教政治思想の試論、第三章　世紀末の新右翼。

Ⅳ．二十世紀の新しい綜合　第一部　ロシア革命の影響のもとで――《インターナショナリズム》第一章　レーニンとレーニン主義、第二章　スターリン主義――スターリン以前その間、以後、第三章　ロシアに照らしてみるマルクス主義論争。第二部　ファシズム的解決――《権威》第一章　イタリア・ファシズム、第二章　ヒトラー主義とそのドイツ的先駆、第三章　ファシズム的収斂。第三部　自由主義モデルの再検討――《デモクラシー》第一章　フランスの〝第三の途〟、第二章　社会民主主義の理論と実践、第三章　ケインズのケインズ主義、ケインズなきケインズ主義。

Ⅴ．炸裂　第一部　第三世界と第三世界主義――《独立》第一章　民族主義と社会主義――ファノン、第二章　毛沢東とその周辺、第三章　現代イスラームの政治理論。第二部　政治に対する新たな諸問題――《自律性》第一章　精神分析と政治、第二章　性の解放の政治、第三章　〝六八年のパンセ〟？　第三部　西欧の疑問――《個人》第一章　〝全体主義〟批判、第二章　古典的自由主義および蘇えった自由主義、第三章　今世紀末のイデオロギー状況。

すでに述べたように、本書は、独りの著者によって「統一的ペルスペクティヴ」のもとに書かれたのではなく、各章はそれぞれ、専門家による独立した論文とみなしてよい。当然のことながら、それらは、フランスの読者のために、彼らの理解を深める教育的道しるべであることを目的としている。したがって、その政治思想史は、ある意味でフランス的であると言えよう。例えば、ホッブズ政治学は、十七世紀フランスで論争の的となったが、まさにそれはフロンドの乱を実感させるものであったからである。ホッブズとともにボッシュエが取りあげられるが――absolutisme théorique と absolutisme théocratique とは区別されるべきだが――、両者は、国家の必要性と服従への絶対的義務を説いた点で共通する。ロックの政治思想はフランスの政治的リベラリズムにどのように受容されたか。それは、カトリック思想家、あるいは《貴族的リベラリズム》と称せられる人びとの著作に痕跡をとどめている。そして、フェヌロンの『市民政府に関する哲学的エッセイ』がロックと対比されて論じられているのも特徴的である。

モンテスキューに関しては、彼がモンテーニュからパスカルにいたるピュロン的伝統に対して、「事物の隠れた理性」を認識しようとしたこと、「理性への確信」を抱いていたことが強調される。彼の統治形態のティポロジーにおいては、gouvernements modérés と gouvernements despotiques との二項対立が

問題であって、彼の「権力の均衡」は、アルチュセールが非難するように、不平等社会の特権階級の権力維持が目的ではなく、専制政治と権力濫用を阻止する手段なのであった。ルソーに関しては、彼は《自我》と《道徳的良心》のうちに、社会に対する批判の権利要求を見出す。ルソー的批判の根底には、たえず être と paraître との対立があって、そのことが一貫して cité juste への問いとなる。彼の求める「社会関係の透明性」とは、結局は古代的郷愁であって、そのためのプロジェが《市民》教育である。ルソーの作品には nation あるいは national という言葉が多く見られるが、彼の眼差しは、十九世紀ナショナリズムの生まれいずる神話に注がれていた。この章を担当しているのはポーランド人のジュネーヴ大学教授ブロニスラウ・バチュコ (Bronislaw Baczko) である。彼の *Rousseau, solitude et communauté* は、ストラビンスキーの *Jean-Jaques Rousseau: la transparence et l'obstacle* と並んで名著に値するが、フランスの古典についての執筆を外国の研究者に委ねているのも本書の特質のひとつである。

ところで、産業革命の上昇するエコノミーに対応するポリティークのイデオロギーは、自由主義と社会主義である。そして、その思想的創造の源泉となったのは、産業化の遅れたフランスとドイツであった。これら二国の思想的差異——tonalité を分つものは、社会・経済的状態というよりも、むしろ知的・文化的遺産であった、サン・シモン／ヘーゲル、プルードン／シュティルナー、コント／マルクス、バレス／ニーチュ……というように。しかも、これらドイツとフランスの思想家たちによって提示された問題解決は、同時に希望への途と幻滅の翳りを二十世紀に落としている。このような観点から、本書のなかには、政治思想史においてこれまで看過されがちであった多くの思想家たちが取りあげられている。とりわけ、フランス社会主義の意義は、ヘーゲン主義やマルクス主義に劣らず、重要である。ピエール・ルルー (Pierre Leroux) が《socialisme》という言葉を発ったのは一八三三年であったが、七月王政から第二共和制の終りにかけて、「最初の社会主義者たち」、なかにはサン・シモン主義者も含まれていたが、——彼らはマルクスおよびエンゲルスによって《ユートピア主義者》として批判されたが、いずれもともに啓蒙と革命の哲学を継承し、七九年の革命を完成しようと欲していた。彼らの改革のためのプランや労働者の組織と教育のための構想は、まことに多彩な思想体系を生みだし、豊饒な想像力をたたえている。

フランスにおいて、そしてマルクスにとってさえも、影響力の大きかったのはプルードンである。「マルクスはプルードンなくしてはあり得なかったであろう」(G・ギュルヴィッチ)。『聖家族』におけるプルードンの章句は、やがてマルクス自身のテーゼとなり、プルードンは「科学的社会主義」の創始者として承認されている。プルードンはマルクスへの書簡で、その独断論と革命的ロマン主義に対して警告したが、これに激怒し

たマルクスは忘恩をもって報い、『哲学の貧困』において、プルードンに対する否定的ファナティズムを露わにした。プルードンの社会主義は、西欧世界に広く波及し、第一インターとパリ・コミューンのときには、プルードン主義者が多数を占めていたのである。ジョーレスの「自由主義的社会主義」は、直接プルードンに由来し、彼の遺産はペギーを通してムーニェへ、さらにジァン・ラクロワへと継承されている。個人の自由と社会的解放をめざし、個人と社会の動態的均衡、生産社会における自己管理を実現しようとする権力否定の思想（an-archisme）は、国家主義（*Etatisme*）と真向から対立する。「われわれの時代の論議およびわれわれの未来の闘争とプルードン的調和との立て直しは、いつまでも終えることはないであろう。一九六八年、占拠されたソルボンヌの校庭には、プルードンの肖像があった」と、ジァン・バンカル教授（ソルボンヌ）は書いているが、目撃者ならではの証言であろう。

同じように、《プロレタリアート》概念について、ダニエル・リンデンベルク教授は、その冒頭に、われわれの深い偏見に反して、その近代的概念はマルクスの独創ではなく、オーギュスト・コントによるものであって、特に左翼と結びついて生まれたものではない、と論じている。十九世紀的意味での労働者階級とプロレタリアートとの内的連関が見失われたのは、ロシアにおいてプレハーノフとレーニンによって、プロレタリアート独裁がイデオクラティックなものとなったからである。ところで、ドイツの歴史家ヴェルナー・コンツェが証明しているように、《proletarius》という古い、ラテン語の言葉が復活したのは、乞食、浮浪者など、浮動するマスを指示するためであって、彼らは、資本の《本源的蓄積》（マルクス）および狂気の《大幽閉（grand enfermement）》（フーコー）の所産にほかならない。彼らは《危険な階級》であった。プロレタリアートは、マルクス主義の知的勝利とともにその意味が変容し、「歴史的使命に合致するための労働者階級のあるべきもの」とされるにいたった。このことは、『一八四四年の手稿』から『共産主義と平和』（サルトル）まで変わることなく、この「プロレタリアートの形而上学」の最も明瞭な証明が『歴史と階級意識』である。ルカーチの著作がレーニン主義の真理の表現であるか否かはともかく、それは、後にメルロ＝ポンティのいう《ウルトラ＝ボルシェヴィズム》に等しきものである。レーニン主義によって、プロレタリアートの名のもとに語る党の全能性が代置されるが、フランスにおいても、革命的サンディカリズムの党機関誌が、一九二五年から *La Révolution prolétarienne* と呼ばれるようになる。今日西欧においては、革命的ユートピアのいちじるしい凋落につれて、プロレタリアートへの関心が薄らぎつつあるが、例えば、アンドレ・ゴルツが「プロレタリアートへの訣別」を告げ、グルュックスマンが plèbe への回帰を提唱していることは、いかにも象徴的である。このような素材は、パリの大学の講義のなかではじめて、生きいきと語られるであろう。

二十世紀の新しいサンテーズには、いずれも問題の核心に迫る諸論文が含まれている。そのひとつスターリン主義についてみると、その政治体制は、全体主義国家の確立による《歴史現象》であって、たんなる《個人崇拝》に還元できるものではない。その決定的な特徴は、党による官僚的独裁というべきものであり、スターリン主義がスターリンを生みだしたのである。ファシズムに関しては、それは二大戦間のヨーロッパの文化的危機に対するラディカルな試みであった。リベラルな国家に対して異議を申立て、階級闘争のドグマを排撃する運動は、急速に左翼から右翼へ、反革命的勢力へと転化するが、それは伝統的右翼と根本的に異なる。ドイツにおける《保守革命》の世代とパラレルに、フランスにおける《新しい世代》には、ファシズム的知識人が輩出したが、その典型的な例がソレルとアンリ・ド・マンであった——後者の、このベルギー人の『マルクス主義の彼方へ』(*Au-delà du Marxisme*, 1926) は、我が国では余り取りあげられないが、「マルクス主義の修正」理論として、当時ヨーロッパに反響を及ぼした。物質的・経済的構造の分析に代って、心理学的現実が、フロイト、ユング、ミヘルズを採用することによって、新たな照明を与えられたのである。フランスにおける「ファシズム的収斂」の執筆者、ヘブライ大学の歴史学教授ゼーブ・シュテルンヘルによれば、パレート、ミヘルズ、モスカ等は、勿論ファシストではなかったが、そのイデオロギーに理論的貢献をなしたことは疑い無い。また、著名な政治学者ド・ジュヴネルは、三〇年代初めには、ドリュ・ラ・ローシュ等とともにナチスと協力関係にあり、少なくともParti populare français に参加していたという事実が実証されている。

いかなる十九世紀的イデオロギーの構図も思い及ばぬ Eclatement の現象が、第二次大戦後に発生した。第三世界の非植民地化、アジアにおける毛沢東主義、イスラームのナショナリズム、そして西欧がみずからに向って問わなければならない「新たな問題」の数々である。ここでは、ファノンの思想と《六八年のパンセ》について簡単に述べておく。『地に呪われた者』の考察の出発点——そして帰結——は、二つの世界に異なった人間が住んでいるということである。「支配種族とはなによりも先ず、他処からやって来た種族、原住民 (autochtones) とは似ていない種族、つまり《他者》("les autres") である」。植民地化された土着民の解放とは、彼らの「民族的実存」(existence nationale) の表現である。その「民族的意識」は、伝統に固執する民族ブルジョワジーのナショナリズムを超えて、社会主義へと高まりゆく普遍的価値の自覚である。歴史的体験に根差したファノン主義は、現代の社会主義モデルから分離せざるを得ず、農民階級を革命的主体とする「自然発生性」を標榜し、「仮面をぬぎすてたブルジョワ独裁の近代的形態」として一党独裁を断罪し、マルクス主義的科学をそのまま容認できない。ファノンのいう暴力は、その短い生涯を埋めつくした噴怒、人間の理性を辱かしめた西欧の征服的理性に対するユマニスム、

の反抗であって、殺人の血で汚れた思想ではない。《Décidons de ne pas imiter l'Europe》――『地に呪われたる者』の一九六八年の新版には、有名なサルトルの序がはぶかれているとのことであるが、それは何を意味するか。

「五月は、その表面的な透明さのなかで、なおひとつのエニグマにとどまっている」。ジャン＝ピェール・ベルナールは、一九六八年五月をめぐる多様な、相反する解釈の共存を指摘する。実際に、五月のパンセには一貫性が欠如しており、それを唯一の原因によって説明することは困難である。「五月には《le Sens》（意味であると同時に、感性、または肉体的官能でもある――筆者）がまさに絶頂に達し、燃えあがった」。この歴史的形象は、一八七一年のパリ・コミューンに最も似つかわしく、かかる歴史的瞬間には、「サルトル的《溶解集団》のモード」が支配していたという。しかしながら、五月革命はまた、さまざまな人間科学の台座のうえに生まれたのであった。ベルナールのいう「理論＝テクストへの訴え」に先鞭をつけたのは、ほかでもないアルチュセールであるが、lecture/relecture がもたらした効果とは、「アルチュセールはマルクスを読み返し、ニコス・プーランサスはマルクスを読み返しながら、アルチュセールを読みとる。研究者あるいは学生たちは、マルクスを読み返しアルチュセールを読み返しながら、プーランサスを読みとる」といった具合である。ジャック・ラカンの周辺の精神分析の場合も同じことで、このような「理論の帝国主義」が、逆説的だが、みずからの出現を理論的に解明しえぬ無力さから派生しながらも、以後フランスの知性の場面を蔽いつくす。八〇年代の巨匠たちの相次ぐ死によって、「この悲しきイメージの中断は、一九六八年の余りあらわにされなかった一側面に投げ返される。戯れの爆発と心情的な吐露のかたわらに、五月の出来事のなかにはより一層曖昧な、より一層陰鬱な側面がある。一九六八年は、フランス史の革命的瞬間のうちで最も深い闇であったかに思われる」。la nuit et l'incendie――五月を比喩をもって示せば、思想の暗い夜空に赫々と燃えさかる火災、ということになろうか。つづく七〇―八〇年代には、権力に反抗する個人、小集団、女性解放、地域の分権化……革命の分子運動（ドゥルーズ、ガタリ）が無限に散乱してゆく。ベルナールは次のようにこの章を結んでいる。「テロルのさなか、《革命は凍りついてしまった》とサン・ジュストは叫んだ。一九六八年五月以降、人びとは言うかも知れない、フランスでは、革命のイデーは燃えつきた、と」。

以上は、本書の特質を記そうとしたために、もっぱらフランスの思想史の一面に力点を置いたが、勿論、本書には、イギリス、アメリカの諸思想にも多くの頁が割かれている。社会科学高等学院のセルジュ＝クリストフ・コルムによって書かれた個人主義と自由主義の再検討は、ケインズ、ハイエック、M・フリードマン、ブキャナン、ノージック、ロールズ等を引照しつつ、経済学と政治哲学の専門的議論を展開した好例である。だ

が他方で、ドイツ思想のなかで、例えばフランクフルト学派については、テーマとしても全体主義に関する一解釈として、マルクス主義のエピゴーネンであるかのごとくひと言触れられているにすぎず、マルクーゼの思想にしても、五月革命とのかかわりで、その影響力はフランスにおいて殆んど皆無であったといわれる。さらに、とりわけ我が国においては、知的過剰なほどに、眩いばかりのポスト・モダンの思想家の群像も、当のフランスでは現在のところ、さほど重要な思想的位置を占めているようには思われない。このことは、サルトルの場合にも言えることであって、彼の名前はごく僅かに、しかもネガティヴな意味合いで引用されているにすぎず、我が国の読者にとっては些か不可解に感じられるかも知れない。日本に関してはどうであろうか。索引事項にはひとつも見出されないが、本書全体のなかで、明治時代と日露戦争の年代のほか、国名が五ヶ所ほど記されている。だがいずれにせよ、日本の思想それ自体の問題ではなく、十九世紀末のマルクス主義の世界的拡散、中国の五・四運動、あるいは五月革命の出来事の連続性といったコンテクストで触れられているだけである。政治思想に関するかぎり、日本および日本人の思想ならびに学問研究は（毛沢東の章の参考文献のなかに、竹内実氏の『毛沢東選集』十巻が掲載されているのが唯一である）、フランスにとって、否ヨーロッパにとって縁遠いものと思われても止むを得ない。

奈良　和重